

チューリヒ・トーンムレ管へ

「私の両親は演奏することはできなくても、音楽好きでした。6歳上の姉が練習していたヴァイオリンの旋律を僕がすぐ歌ってしまうので、姉のヴァイオリンの先生の特別な計らいで、6歳から入学可能な音楽学校入試を5歳で受けさせてもらい、特別入学してヴァイオリンを始めました。3年後、学内のコンクールで優勝し、9歳で初めて挑戦した地区のコンクールで優勝、11歳で初体験のポーランド国立コンクールで優勝、13歳で初めての国際コンクールとしてユーティ・メニューイン国際コンクールを受け、第2位だったのですが、メニューイン自らの指揮でまわるコンサート・ツアーに抜擢され、そのころプロになる決心が固まりました」

しかし共産圏の規制に阻まれ、コンサート・ツアーに出るのも容易ではない。そこで多くのコンクールに出場しては賞金

2012年、ファビオ・ルイジが音楽総監督に就任した際に改名されたフィルハーモニア・チューリヒは、それ以前もチューリヒ歌劇場管弦楽団として、ドイツのオペラ専門誌『オーパンヴェルト』にて、「最優秀歌劇場管弦楽団」に選ばれた実績を持つが、改名後の彼らは、歌劇場付きオーケストラとしてだけではない成長が、目覚ましい勢いに満ちている。改名と共に自主レーベル「フィルハーモニア・レコード」も創設し、日本でもキングインターナショナルからリリースされている。そのラインナップの中で、リムスキー・コルサコフ『シエラザード』のソロを高貴な甘さで聴かせるのが、ポーランド出身のコンサートマスター、バルトウオミニ・ニジヨウだ。



ソリストとしても華々しいコンクール歴を誇るニジヨウ。ナイジェル・ケネディとのコラボなど、クラシック以外の活動も行っている ©中東生

を集め、政府が留学を認めるのに十分な金額をクリアして、無事、スイスのローザンヌに留学した。だがスイスの物価の高さに、その資金は底をつきそうになる。そんなころ、チューリヒ・トーンムレ管弦楽団のコンサートマスター補佐としてオーケストラに入る決意をした。

「ソロ・パートは知っていた曲でも、多くのオーケストラ・パートを短期間で習得するのは大変でした。また、「オーケストラの中の弾き方」にも苦労しました。自分一人で弾くのではなく、オーケストラ全体の一部として、少なくとも第1ヴァイオリン全体の集団として弾いていくことは、新しい学びでした。例えば、自分で速いテンポで弾き始めたところ、ブルトの後ろの方がついて来られなかったりして、全員を導くという責任をずっと感じました。いま当時の自分のような歳の学生を教えていると、自分も技術をまだ学んでいかなければならない年齢で、コンサートマスターになるということがどれだけ困難か、改めて実感します」

チューリヒ歌劇場の オーケストラへ

ヴァイオリンを学ぶうえで困難に出会ったことはなく、多くても一日4時間ほどの練習で十分だったと涼しく語るニジヨウにも弱点はあった。初見が速いかわりに暗譜では苦労したという。その弱点を考えると、オーケストラに合っているのかもしれない。コンサートマスターの仕事に慣れて来たころ、大きなソロが

連載

世界のコンサートマスターに聞く
Interview with Concertmaster in the world

第33回

バルトウオミニ・ニジヨウ

(フィルハーモニア・チューリヒ第1コンサートマスター)

Bartłomiej Nizioł - First Concertmaster of Philharmonia Zürich

取材・文＝中東生 Shinobu Naka



オーケストラ・ピットならぬコンサートのステージで。オペラのオーケストラであるフィルハーモニア・チューリヒの、コンサートにおける演奏能力も評価が高い © Monika Rittershaus

バルトウオミ・ニジヨウ (Bartłomiej Nizioł)

1974年、ポーランドのシュチェチンに生まれる。5歳からヴァイオリンを始める。1991年、ヴィエニャフスキ国際ヴァイオリン・コンクール、翌年ブリュッセルのユーロビジョン・ヤング・ミュージシャンズ、さらに翌年にはロン＝ティボー国際コンクールと制覇した他、多数のコンクールで優秀な成績を収める。1994年、ポーゼン音楽アカデミーでソリスト・ディプロム取得後、ローザンヌ音楽院でピエール・アモイアルに師事。1997年から6年間、チューリヒ・トーンハレ管のコンサートマスターを務めた後、2003年から現職。現在はベルン音楽大学で教鞭をとる他、ポーランドで室内オーケストラを立ち上げポーランド音楽の普及やスイス人現代作曲家の紹介などの音楽交流にも力を入れている。

それから今まで自分が弾く機会のなかったこのオペラを今シーズン、初めて弾けるのが今からとても楽しみです」

二つのオーケストラの違い

チューリヒにあるオーケストラの双壁である、チューリヒ・トーンハレ管とフィルハーモニア・チューリヒ両方のコンサートマスターを務めて、この二つの楽団の個性をどう捉えているだろうか。

「オーケストラとしてのレヴェルは同じだと、特にこのところ思います。以前は違ったかもしれませんが、最近のわれわれのオーケストラはすごい勢いで進歩しています。先シーズンのツアーでも、アンネツフィー・ムター (Vn) がソリスト

で13回演奏したのですが、毎回よくなっていくのが手に取るようになりました。彼女はすごい！ ライヴで聴いたこととはなかったのですが、毎回エネルギー全開で登場し、毎回違う、素晴らしいパフォーマンスをするのです。人間的にもポジティブで、一定の距離感を保ってはいても、好感度は高いです。オーケストラはツアーに出ると、ほぼ毎日旅をして、別の場所

で演奏して、と疲れますが、その代わり成長度は目を見はるものがあります。両方のオーケストラを比べると、トーンハレ管

は弾く音符の総数が少ないのに、リハールは多い、歌劇場はレパートリーも多く、相対数の音符を弾いているのにリハ

演奏時は音楽が一番、良いお手本になるのが務めだと思います

まわって来ない？ 番手のコンサートマスターでは満足できなくなり、第1コンサートマスターを探していたチューリヒ歌劇場管弦楽団へ2003年に移籍した。オペラのレパートリーを一から学んでいくことが苦ではなかったのだろうか。「おっしゃる通り、チューリヒ歌劇場はレパートリー劇場なので、再演演目は少ないリハールで本番を迎えるため、初めは大変でしたが、実は私は歌手と弾くのが大好きなので、

ハウスがなかったの、11〜12歳の時、一番近いオペラ・ハウスまで行って観たオペラがブッチェニ《蝶々夫人》でした。

両方のオーケストラを比べると、トーンハレ管は弾く音符の総数が少ないのに、リハールは多い、歌劇場はレパートリーも多く、相対数の音符を弾いているのにリハ

サルは少ないのです。それぞれ長所短所があります。リハール時間が多いと、細部までみっちり仕上げるため、本番で失敗した時など、攻撃性すら感じます。その点、歌劇場の大らかな雰囲気は間違えても許されるため、まず音楽として感覚で捉えて演奏する自由を得られます。それから伴奏は、歌劇場のほうがやはり上手いです。ベルナルト・ハイティンクやクリストフ・フォン・ドホナーニ、ネッロ・サンティなどの指揮者に導かれ、ピョートル・ベチャワ (T) やヨナス・カウフマン (T) など、当歌劇場が有名にしたと自負しています」

今後のヴィジョン

最後にコンサートマスターの難しさと今後のヴィジョンを尋ねた。

「団員全員のモチベーションをあげることです。それぞれ私生活や問題を抱えていても、演奏時は音楽が一番、愛と情熱を持って弾く良いお手本になるのがコンサートマスターの務めだと思います。今後は良いホールでのコンサート・ツアーを計画して、より成長していきたいと思っています。ルツェルンのルツェルン・カルチャー・コングレスセンターなどは近いですが、以前は毎年あったロンドン、パリでのコンサートなども必要で、オーケストラ・ピットにこもるだけでなく、良い音響のコンサートホールで演奏する経験が、オーケストラを育てると思います」

今シーズンも新たな成長が楽しみです。オーケストラだ。